

ト  
〔門〕とト  
〔戸〕とト  
〔外〕

蜂 矢 真 郷

一、ト  
〔門〕

二、ト  
〔戸〕

三、ト  
〔外〕

四、ト  
〔処〕

五、ツ  
〔津〕

ト〔門〕・ト〔戸〕・ト〔外〕などについて、上代の例を中心に、それらを前項ないし後項に持つ複合語を含めて挙げ、検討する。

上代特殊仮名遣のト甲類であるト〔門〕とト〔戸〕とは、通常、ともにとらえられている。同じくト甲類であるト〔外〕も、これらとともにとらえられる。また、ト甲類のものもト乙類のものも見えるト〔処〕について、その甲類のものはいくらかは、ト〔門〕ととらえることができる。そして、ト〔門・戸〕と母音交替のものにとらえる説のあるツ〔津〕は、母音交替ととらえるのが困難である。

ト「門」とト「戸」は、いずれも上代特殊仮名遣のト甲類のものであり、通常、ともにとらえられている。例えば、『時代別国語大辞典上代編』（以下、『上代編』と示す）には、

①門。家の外郭にある入口。ある地方へ入る入口をもいう。（略）②河口や海の、両岸が迫って門のようになっている地形。（略）③戸。門・出入口・窓などにたてるもの。（略）

とあり、また、『岩波古語辞典』には、

《ノミト（喉）・セト（瀬戸）・ミナト（港）のトに同じ。両側から迫っている狭い通路。また、入口を狭くし、ふさいで内と外を隔てるもの》①出入口。（略）②狭い通り路。出入りの路。（略）③水の出入口。瀬戸。（略）④家の出入口や窓に立てて、内と外とを隔てるもの。（略）

とあって（右に「（略）」としたのはいずれも用例である）、『上代編』の、①②がト「門」に、③がト「戸」に当たり、また、『岩波古語辞典』の、《内》の「両側から迫っている狭い通路。」の部分および①②③がト「門」に、《内》の「また」以下および④がト「戸」に当たる。

本稿は、上代の例を中心に検討し、ト「門」とト「戸」、および、それに加えてト「外」をも、ともにとらえようと

するものであるが、合わせて、それに関するいくつかのことについても述べることにしたい。

## 一、ト「門」

初めに、ト「門」の例を挙げるが、いくつか分類して挙げることにする。

まず、家や家の外郭の出入口を表すものがある。

マド「窓」 窓闌交映上末土（略）（新訳華嚴經音義私記）  
マド「窓」は、そこから家の外を見るト「門」であり、  
《マ「目」ト「門」の意》（『岩波古語辞典』）とされる。  
マ「目」は、メ「目」の被覆形である。

カド「門」 我が門の《和我可度乃》片山椿 まこと汝  
我が手触れなゝ地に落ちもかも（萬四四一八・防人歌）  
カド「門」は、メ「目」の被覆形である。

カナト 大前小前宿祢がかな門蔭《加那計加宜》かく  
寄り来ね雨立ち止めむ（記允恭・八〇）  
カナトは、メ「目」の被覆形である。

カド「門」は、「門。表口。前庭。」（『上代編』）の意とされる。このうち「前庭」は、カド「門」の周辺ではあっても、カド「門」そのものの意ではないであろう。

カナトは、「門。金属製の門か。」（『岩波古語辞典』）とされるが、「金属で扉や柱を堅め飾るためにカナ戸」といわれる。（略）カナについてはなお考慮の余地がある

う。」「上代編」「考」の欄）とも言われ、「類義語にカナトがある。」「上代編」カド「門」の項）ともあつて、カド「門」の類義語としてのカナトのカナをカネ「金」の被覆形ととらえることについては疑問が持たれる。

そして、これらのカド「門」・カナトがデ「出」と複合したところの

カドデ「門出」 赤駒が門出をしつゝ、可度弓乎思都

と、出でかてにせしを見たてし家の児らはも（萬三

五三四・東歌）

カナトデ 防人に立ちし朝開のかな門出に、可奈刀侶

尔、手離れ惜しみ泣きし児らはも（萬三五六九・東

歌）

の例とを合わせ見た場合に、カドデ「門出」とカナトデとは同様の意に用いられているかと見られて、つまり、カド「門」とカナトとが同様の意を表すかと見られて、カナトが金属製の門などであると考えする必要はないのではないかと見られる。

ここに思い合わせられるのは、ヤギ「柳」「青楊の（安平楊疑能）枝伐り下ろし湯種時きゆゆしき君に恋ひ渡るかも」（萬三六〇三）・ヤナギ「柳」「青柳（阿乎夜奈義）梅との花を折りかざし飲みての後は散りぬともよし」（萬八二一）と、この節で後に挙げるミト「水門」・ミナト「水

門」とである。ヤギ「柳」とヤナギ「柳」とは同様の意に用いられており、後に見るように、ミト「水門」とミナト「水門」とも同様の意に用いられていると言える。そして、これらヤナギ「柳」・ミナト「水門」のナは連体の格助詞と見られる。

これらのことを合わせ考えると、カナトのナは連体の格助詞と見て、カナトはカド「門」と同様の意を表すとしてよいと考えられよう。

なお、カド「門」・カナトのナが何であるかは、必ずしも明確でない。「カはスミカ・アリカのカ。（略）」（『岩波古語辞典』）、「か」は「ありか」「すみか」などの「か」で、所の意。（略）」（『古語大辞典』の「語誌」欄、夏井邦男氏執筆）とされていて、確かにその可能性もあると思われるが、アリカ・スミカなどのようにナが複合語の後項にあるものに対して、カド「門」はナが複合語の前項にあるものであり、両者を直ちに同様にとらえてよいかどうか明らかではない。

次に、神域の出入口を表すものがある。

カムト「神門」 所<sub>三</sub>以<sub>三</sub>芳<sub>三</sub>神門<sub>三</sub>者 神門臣伊加曾然

之時 神門負<sub>三</sub>之<sub>三</sub>故云<sub>三</sub>神門<sub>三</sub>（出雲国風土記・神門

郡）

ミト「御門」 所<sub>三</sub>造<sub>三</sub>天下<sub>三</sub>大神之御門 即右<sub>三</sub>此処

故云「三刀矢」(同・飯石郡)

カムト「神門」は、「神域の入口に設けた門。鳥居のようなものか。」(『上代編』)、「神の支配するところへの入口のしるし。」(『岩波古語辞典』)とされ、和名類聚抄・元和古活字本に、地名「神門加無止」(出雲国郡名)が見える。

また、ミト「御門」は、地名「三刀矢」の起源の説話の例であつてミトと訓まれ、「大神之御門」とあつてカムト「神門」と同様のものと見られる。

さらに、地方の出入口を表すものがある。

ナラト・オホサカト・キト(大坂)

自「大坂戸」亦遇「跛盲」唯「木戸」是掖月之吉戸(記垂仁)

これらの「那良戸」「大坂戸」「木戸」は、それぞれ奈良・大坂・紀伊の出入口の意に用いられている。「掖月」「吉戸」の「戸」も、地方の出入口を表すと見てよいものである。

ヨミド「泉門」亦所「寒」其黄泉坂之石者号「道及之大神」亦謂「寒坐黄泉戸大神」(記神代)

ヨミド「泉門」は、黄泉の国の出入口の意に用いられ、「よみのくにの入口。」(『上代編』)とされる。地方の出入口を表す例として右に挙げたが、黄泉の国は黄泉の神の支配する地域でもあるので、神域の出入口を表すと見ること

もできよう。

今一つ、水の出入りする所を表すものがある。

ト「門」……由良の門の「由良勝計能」門中の海石に「斗賀能伊久理余」……(記仁徳・七四) 淡路島門渡る舟の「刀和多流船乃」梶間にも我は忘れず家をしと思ふ(萬三八九四)

このト「門」には、複合語としてではなく単独で用いられる例があるが、単独のものも、トナカ「門中」など複合語のものも、ト「門」は水の出入りする所を表している。

ミト「水門」夜中はかりに船をいだして、阿波の水門をわたる(土左日記)

ミナト「水門」水門の「瀾灘度能」潮の下り海下り後も暗に置きてか行かむ(斉明紀・一二〇)

「阿波の水門」(土左日記)は、今の鳴門海峡に当たる。ミト「水門」・ミナト「水門」については、先にカドデ

「門出」・カナトデのところであれたが、ミト「水門」は、「水の出入りするところ。河口など。水門。船の碇泊に適した場所である。ミナトとも。」(『上代編』)とされ、ミナト「水門」は、「①水の出入りするところ。河口・湾口・海峡など。」②河口などで、船の碇泊するのに適したところ。」(『上代編』)、「ミは水。ナは連体助詞。(略)両側からせまった出入口」(『岩波古語辞典』)とされるよう

に、ミナト「水門」のナは連体の格助詞であり、両者は同様の意に用いられていると言える。そして、ミト「水門」・ミナト「水門」のトは、狭い水の出入口を表すと見られる。また、それらのミは、水の意を表し、ミマタ「水派」「水派 此云美麻多」(用明紀二年)やミヲ「水脈」「堀江漕ぐ伊豆手の舟の梶つくめ音しば立ちぬ水脈速みかもへ美乎波也美加母」(萬四四六〇)などのミである。また、ミナト「水門」は、「船の碇泊するのに適したところ」と言われていて、ミト「水門」・ミナト「水門」は、ミナト「港」「思ほえず袖にみなとのさはぐ哉もろこし舟の寄りし許に」(伊勢物語、和歌)に適していたと見られる。

ナルト「鳴門」<sup>三六六〇</sup> これやこの名に負ふ鳴門のへ名尔於布奈流門能<sup>三六三八</sup> 渦潮に玉藻刈るとふ海人娘子ども<sup>三六三八</sup> (萬

ナルト「鳴門」<sup>三六六〇</sup> は、「潮流が激しい音を立てて流れる海峡。」「(『上代編』)、「トは両側からせまった狭い出入口。」「(略)」「(岩波古語辞典)」とされて、動詞ナル「鳴」：「負ひ征矢のそよと鳴るまでへ曾与等奈流麻泥」嘆きつるかも」(萬四三九八)の終止形ナルト「門」の構成ととらえられる。<sup>四四三三</sup>

なお、ナル「鳴」は四段動詞でありその終止形と連体形

とは同形であるので、ナルト「鳴門」のナルを連体形と見ることでもできそうであるが、例えば、イツミ「泉」「うつほのめぐり掃き浄めてありけば、前より泉出で来る」(宇津保物語・俊蔭)は、同様に動詞十名詞の構成である、つまり、下二段動詞イツ「出」：「青山に日が隠らばぬばたまの夜は出でなむへ用波伊傳那牟」：(記神代・三) + ミ「水」の構成と見られ、その場合に、イツは終止形であり連体形ではないので、イツミ「泉」のイツもナルト「鳴門」のナルも終止形と見るのがよいと考えられる(終止形と見たものは、被覆形の一形態ととらえる方が、さらによいと考えられる)。

セト「瀬戸・迫門」<sup>四九</sup> 隼人の薩摩の瀬戸をへ薩麻乃迫門乎<sup>四九</sup> 雲居なす遠くも我は今日見つるかも<sup>四二四</sup> (萬二四

セト「瀬戸・迫門」<sup>四九</sup> は、狭いト「門」の意であり、「狭い門。両側が迫って門のようになっている場所の意。」「①川の渡り瀬。」「②海峡。」「(『上代編』)、「セはセシ(狭)・セマリ(迫)・セキ(関)のセ、(略)」「(岩波古語辞典)」とされ、和名類聚抄・高山寺本および元和古活字本に、地名「勢門世止」(筑前国糟屋郡)が見える。また、セト「渡らす迫門」(以和多邏素西渡)石川片淵 片淵に網張り渡し：(神代紀下・三)は、川についての例である。

ところで、右に見たように、『岩波古語辞典』には、セト「瀬戸・迫門」のセは「セシ(狭)」のセとあるが、これには問題がある。形容詞セシは、上代の例が見当たらず、中古にはトコロセシ「わがためはまして所狭きにこそあらめと思へば」(蜻蛉日記)として用いられるのが通常であり、単独のセシは、「人の心憂<sup>おも</sup>せくして口さがなく素なほならねば」(わらんべ草)のように近世まで下るからである。

セシについては、別稿(一)「一音節語幹の形容詞」に述べたことがあるが、工藤力男氏「上代形容詞語幹の用法について」が、「上代」において「ク活用形容詞の語幹が、単独でニ語尾をとることはない」と指摘される(シク活用形容詞の語幹も単独でニを伴うことがないことを合わせ指摘される)ことが重要で、「山も狭にへ山毛世<sup>せ</sup>」咲けるあしびの…(萬一四二八)・…浜も狭にへ濱毛勢<sup>せ</sup>」後れ並み居て…(萬一七八〇)などのように、上代において、くモ狭ニの形でセ「狭」は単独でニを伴うので、もし、ク活用形容詞セシがあればその語幹セは単独でニを伴うことがないことになり、ク活用形容詞セシはないと考えられる。

ただ、これは上代におけることであって、別稿(一)・同(二)「語幹を共通にする形容詞と形容動詞」・同(三)「語基を共

通にする形容詞と形容動詞」にふれたように、マロニ「沈をまろに削りたる貫<sup>ぬき</sup>實<sup>じつ</sup>」(宇津保物語・菊の宴)、ユルニ「花さそふ風ゆるに吹ける夕暮<sup>ゆふぐれ</sup>に」(同・国譲下)のように、下ると宇津保物語に形容詞マロシ「円」・ユルシ「緩」の語幹マロ・ユル十二の例が見え、また、それ以降にも同様の例が見える(室町時代の抄物に多く見える)。

因みに、『岩波古語辞典』は、セト「瀬戸・迫門」のセを、「セシ(狭)」のセとするとともに、「セマリ(迫)・セキ(関)」のセともしているが、セマル「急・窮」「五箇道相近」(石山寺藏金剛波若經集驗記平安初期点)はセム「責・迫」「…とり続き追ひ来るものは百種にせめ寄り来る(勢米余利伎多流)…」(萬八〇四)が接尾辞ルを伴ったものであり、セキ「塞・関」「焼き大刀を礪波の関に(刀奈美能勢伎尔)明日よりは守部遣り添へ君を留めむ」(萬四〇八五)はセク「塞」「飛鳥川堰くと知りせば(世久登之里世波)あまた夜も率寝て来ましを堰くと知りせば(世久得之里世婆)」(萬三五五七・東歌)の居体言であるこれらについては、別稿四「対義語ヒロシ・セバシとその周辺」に述べたことがある。

カハト「川門」春されば我家の里の川門にはへ加波度<sup>あひこ</sup>尔<sup>わぎへ</sup>波<sup>きと</sup> 鮎子<sup>かはと</sup>さ走る……(萬八五九)

カハト「川門」は、「(略)狭い通過点」川の兩岸から  
せまった所。川の渡り場。」(『岩波古語辞典』)とされる。

以上のト「門」は、既にいろいろ言われているが、家や  
家の外郭の出入口を表すものも、神域の出入口を表すもの  
も、地方の出入口を表すものも、水の出入りする所を表す  
ものも、いずれの場合についても、狭くて出入口となる所  
を表すのが本来であると考えられる。

## 二、ト「戸」

次に、ト「戸」の例を挙げる。

マヘツト・シリツト ……後つ戸よ〈斯都斗用〉い  
行き違ひ 前つ戸よ〈麻幣都斗用〉い行き違ひ……

(記崇神・二二)

マヘツト・シリツトは、「家の表口。前ツ門。」(『上代  
編』マヘツトの項)、「家の裏の入口。後ツ門。」(『同』  
シリツトの項)とされるが、そこにはト「戸」がある可能  
性が高い。土橋寛氏『古代歌謡全注釈』古事記編は、「前  
の戸」「後ろの戸」とされている。ツは、連体の格助詞と  
見られる。

因みに、マヘ「前」は、メ「目」の被覆形マ＋ヘ「方」  
「…本へは〈母登幣波〉君を思ひ出 末へは〈須惠幣波〉  
妹を思ひ出…」(記応神・五一)の構成で、シリ「後・

尻」＋ヘ「方」の構成のシリヘ「後方」「背揮 此云志理  
幣提爾布俱」(神代紀上・第五段一書第七)と対義的で  
あるが、マヘ「前」とシリヘ「後方」とは音節数が異なる  
ので、ここでは音節数が同じであるマヘ「前」とシリ  
「後・尻」とを対義的に用いていると見られる。

イタト「板戸」 ……嬢子の寝すや板戸を〈那須夜伊  
多斗遠〉……(記神代・二)

イタト「板戸」は、板の戸と見られる。

アサト「朝戸」・トノト「殿戸」 ……朝戸にも〈阿佐  
妬珥毛〉出でて行かな三輪の殿戸を〈瀾和能等能渡  
場〉(崇神紀・一六)

アサト「朝戸」は、「朝の家戸。朝、開ける戸。」(『上代  
編』)と、トノト「殿戸」は、「御殿の入口。殿の戸。また  
は殿の戸外。」(『上代編』)とされる。ここに、「または殿  
の戸外。」とするのは、このトを、ト「戸」ではなく後に  
第三節に見るト「外」と見ることになるが、アサトのトを  
ト「戸」とし、他方で、トノトのトをト「外」と見る解釈  
は如何かと思われる。ただ、トノトのトを、ト「戸」と見  
ることもト「外」と見ることもあることには、両者の意味  
の近さという点で注意しておきたい。

トジ「刀自」 且曰 壓乞戸母 其蘭一莖焉  
此云異提戸母  
此云親自  
(允恭紀二年二月)

日本古典文学大系67『日本書紀上』の頭注に、「トジは、トヌシ（戸主、家の入口を支配する女の意）の約。」とあり、トヌシ「戸主」の約まったものと見られる。

トサス「鎖」 鎖着戸須 鎖門上同（新撰字鏡）

戸締まりをする意のトサス「鎖」は、「戸刺しの意。平安時代にはトサシと清音」（『岩波古語辞典』）とあり、ト

「戸」トサス「鎖」「翁、塗籠の戸をさして戸口にをり」

（竹取物語）の構成と見られ、また、「肩トサシ（上上平）」

（名義抄・観法下九二「47ウ」）などから見ると、院政期にはトサスと清音サであつたと見られる。トザスとザに濁音

化したのがいつ頃かは明確でないが、「鎖」（文明本節用

集）とあるので、室町時代にはトザスであつたと見られる。

トビラ「扉」 闔（略合也 門也 門乃止比良（新撰字鏡）

トビラ「扉」は、開き戸の意であり、そのともト「戸」と見られる。トビラ「扉」のヒラは、ヒラク「開」「味酒

三輪の殿の朝戸にも押し開かねへ於辞寐羅箇禰」三輪の殿

戸を」（崇神紀・一七）のヒラとともにとらえられるかと

見られるが、ヒラク「開」のヒラが単独でないし、複合

語の後項に用いられる例は他に見えないので、そのように

見てよいかどうか必ずしも明らかではない。

なお、ヒラカ「平瓮 此云毗邏介」（神武前紀）のよ

うに平らの意に用いられるヒラは、意味が異なり、別語と

見られる。ヒラク「開」のアクセントは、「開ヒラク（平平上）」

（名義抄・観法下七四「38ウ」）のように低起式であり、ヒ

ラ「平」のそれは、「帝比良波利（上上上）」（同・四二八三）

のように高起式であつて、異なっている。金田一法則によ

つて、「ある語が高く始まるならば、その派生語・複合語

もすべて高く始まり、ある語が低く始まるならば、その派

生語・複合語も低く始まる」とされていて、アクセント

が高く始まる（高起式の）ヒラ「平」と、同じく低く始ま

る（低起式の）ヒラク「開」とを、ともにとらえるのは困

難である。

以上のト「戸」は、狭い出入口であるところのト「門」

を閉じる（トツ「閉」）ものを表すと考えられる。

ただ、トツ「閉」「三者諸の惡道を閉ずて、善趣の門を開

ク」（西大寺藏金光明最勝王經平安初期点・春日政治氏釈

文）のトをト「戸」と見るのは、無理があると見られる。

別稿（四）「ダ行上二段動詞語彙考」に挙げたように、ダ行

上二段動詞には、このトツ「閉」の他に、ネツ「捻・捩」

「不鳴雁ノ頸ヲネザテ」（今昔物語集・十12）・ヨツ

「攀」小里なる花橘を引き攀ちてへ比伎余治旦」折らむ

とすれどうら若みこそ」（萬三五七四・東歌）・シコツ

「讒」相ひ讒ヲ詔ヒツ、」（西大寺藏金光明最勝王經平安

初期点・春日政治氏釈文）・オツ「恐・怖」雷の光の如き



これの身は死の大王常に偶へり畏づべからずや（於豆閉可良受夜）（仏足跡歌<sup>11</sup>）・ハヅ「恥・羞」「愧<sup>12</sup>己<sup>13</sup>怖<sup>14</sup>他」（東大寺諷誦文稿）などがあるが、上代・中古に見える、名詞＋動詞化接尾辞ヅの構成ととらえられるダ行上二段動詞は他にないからである。

さらに、トヅ「閉」のアクセントは、「閉トツ（平上）」（名義抄・觀法下七五〔39オ〕）のように低起式であり、ト「戸」のそれは、「戸ト（上）」（同・觀法下九二〔47ウ〕）のように高起式であつて、アクセントが異なっている。金田一法則によつて、高起式のト「戸」と、低起式のトヅ「閉」とを、ともにとらえるのは困難である。

因みに、トヅ「閉」の類義語であるシム・シマルは、上代・中古において、シム「帶（略）オビシム（略）」（名義抄・圖書寮本）・シマル「大君の御子の柴垣<sup>15</sup>八節結り（夜布士麻理）<sup>16</sup>結り廻し<sup>17</sup>（ヘ斯麻母登本斯）切れむ柴垣<sup>18</sup>焼けむ柴垣<sup>19</sup>」（記清寧・一〇九）のように締める意・締まる意に用いられていて、戸をシム「閉」、戸がシマル「閉」のように用いられるのは、「門しめてだまつてねたる面白さ」（俳・炭俵）・「もゝの花境しまらぬかきね哉」（俳・猿蓑）のように、近世まで下ること、別稿<sup>四</sup>に述べた。

### 三、ト「外」

そして、ト「外」の例を挙げる。

ト「外」 大宮の内にも外<sup>20</sup>にも（宇知尔毛刀尔毛）<sup>21</sup>光るまで降れる白雪見れど飽かぬかも（萬三九二六）<sup>22</sup>  
ト「外」は、内に対する外の意に用いられる。なお、内に対する外の意のソト「外」の例は、「室町時代以降、古くからのトに代つて使用される。」（『岩波古語辞典』）とされるけれども、

山人は花をふみてやかよふらむうつきかきほのそとのとほみち（出觀集一四八） ホカラソト、イヘル如何（名語記）

のように、院政鎌倉期から例が見える。

ソト「外」について、『日本国語大辞典』〔第二版〕「語誌」欄<sup>23</sup>（1）は、

語源は、「そ（背）つ（の）おも（面）」（背面・北側・裏側）から転じた「そとも」（同）が「せど（背戸）」への類推もあつて「も」を略したという説が妥当かとする。<sup>24</sup>（↓語源説<sup>25</sup>（1））

ここに言うソトモ「背面」は、ソ「背」＋ツ「連体」＋オモ「面」の約、ソ「背」はセ「背」の被覆形ととらえら

れ、カゲ「光」＋ツ「連体」＋オモ「面」の約ととらえられるカゲトモ「影面」と対義的に用いられる。なお、カゲトモ「影面」・ソトモ「背面」については、別稿(六)「タテ「縦」・ヨコ「横」とその周辺」<sup>15)</sup>にふれた。

山陽 曰ニ影一面ノ山陰 曰ニ背面一(成務紀五年九月・熱田本) 直廣肆佐味朝臣少摩呂為ニ山陽 使者 直肆巨勢朝臣粟持 為ニ山陰 使者(天武紀下四年九月・北野本)

右の後者の例では、カゲトモノミチ「山陽道」とソトモノミチ「山陰道」とが対義的に用いられている。

『日本国語大辞典』(第二版)の挙げる「語源説(1)」は、外はとゝのみにへり。背面を外面と心得たるより、外字を離ちて、そとと訓むは俗の事也。(橘守部『雅言考』) 背面ヲ略シテ、誤用セル語ト云フ。或ハ、背門ノ転カ、或ハ、背外ノ意カ。(『大言海』) のようである。

右の「語誌」欄などの言うセド「背戸」は、顯昭云、そともとはうしろと云事也。(略)古物云、げすの家にはしりへの門をばせどゝ云。そとせと同音也。又只そとゝも云。(袖中抄十九)

とあるのを見ると、ソト「外」と無関係とは考えにくいが、

せどのかたに、米の散りたるを食とて、すゞめの躍り  
ありくを(宇治拾遺物語) あなおもしろの大戸やせ  
どや中戸にもゑかきたり(源平盛衰記三十三)

では、裏の出入口(の戸)の意に用いられており、  
小家ノ後蘭ヲセド、ナツク如何 コレハ背戸歟 背戸歟  
亦賤土歟(名語記) 明くれば林の六郎光明がせどを  
通り給ひて(義経記)

では、裏にある庭などの意に用いられている。このように、  
セド「背戸」は、基本的に裏の意に用いられているので、  
直接にソト「外」の成立に影響を与えたとも考えにくい。

他方、ソトモ「背面」は、下ると、

我がやどのそともにてたてるならの葉のしげみにすずむ  
夏はきにけり(新古今二五〇、恵慶集二一八も同様)  
ねやのうへにかたえさしおほひそともなるはびろがし  
はに霰ふるなり(新古今六五五)

のように、外の意に用いられるようになる。

結局、セド「背戸」の影響もないとは言えないが、ソト  
モ「背面」が、裏・北の意から外の意へと移り、ト「外」  
との混淆によつて、ソト「外」が生まれたと見るのがよい  
かと考えられる。対義的に用いられるウチ「内」と同じ音  
節数にしようとする力が働いた可能性も考えられよう。

L<sup>0</sup>

（『上代編』）、『シナトは「息」な門（と）」で、風の吹き起る所。（略）』（『岩波古語辞典』シナトノカゼの項）のように、風が吹き起る所を表すとされるが、風が吹き起る所と言うより、風が入りする狭い所ととらえる方がよいのではないかと考えられる。

なお、シナトベノミコト「級長戸邊命」・シナツヒコノミコト「級長津彦命」（神代紀上）は、ベ「邊」とメとをバ行―マ行の子音交替ととらえ、メは女の意、ヒコ「彦」は男の意で、不規則的な男女の対応を示していると言える。その際に、シナツヒコのツは、ト「門」の母音交替と見ることになる。

また、シナトのシは風の意で、アラシ「嵐」「ぬばたまの夜さり来れば巻向の川音高しあらしかも速きへ荒足鴨疾」（萬一〇一）・「吹くからに秋の草木のしをるればむべ山かぜをあらしといふらむ」（古今二四九）は、形容詞アラシ「荒」…岩が根の荒き島根に（安良伎之麻弥尔）宿りする君（萬三六八八）の語幹アラシ「嵐」の構成ととらえられる。

ノミト「喉」 喉吻（略）上（略）川乃美土（新訳華嚴經音義私記）

ノド「喉」 一テイノミツラエテハベリシマ、ニノド  
ヲウルフルハベラズ（法華百座聞書抄）

ノミト「喉」は、「（略）語源が飲ミ「処」（または門）とすればト甲類が正しい。（略）」（『上代編』「考」の欄）、「（飲み門（と）」の意」（『岩波古語辞典』）とされて、動詞ノム「飲・呑」「青柳梅との花を折りかざし飲みての後」は「能弥弓能も知波」散りぬともよし（萬八二一）の連用形ノミト「門」の構成ととらえられる。ノミト「喉」のトをト「処」と見ることもあるが、飲む所とするよりは、飲む際の狭い入口ととらえる方がよいと考えられる。また、ノド「喉」は、ノミト「喉」の約まったものである。

ミト 然者 吾与汝行（此七字）（記神代）而為（此七字）美斗能麻具波比（此七字）（同）  
者如（此七字）先期（此七字）美刀阿多波志都（此七字）（同）

ミトは、「陰部。ミは接頭語。トは門または所の意か。」（『上代編』）、「（ミは接頭語。トはトツギ（婚）のト。アタハシは当の意の動詞アタヒの尊敬語）」（『岩波古語辞典』ミトアタハシの項）とされ、そのトは、トツグ「嫁」「鷺鷥（略）或鷺鷥迹波久奈布利日本紀私記云止都岐乎之倍止利」（和名抄・廿卷本十八）のトとされる。ミトおよびそのトは、女性の陰部を表すが、これも、所の意と言うよりは狭い出入口の意であって、そのトはト「処」ととらえるよりト「門」ととらえる方がよいと考えられる。

なお、やはり女性の陰部を表すホト「陰」「次生（火之

夜藝速男神<sup>(夜藝二字以音也)</sup> (略) 因<sup>レ</sup>生<sup>ニ</sup>此子<sup>ニ</sup> 美蕃登<sup>此三字以音</sup> 見

シ炙而病臥在<sup>(記神代)</sup> のトはト乙類であるので、これは、例えばホ「秀」<sup>「千葉の葛野を見れば百千足る家庭も見ゆ國の秀も見ゆ」(記応神・四一)</sup> 十ト「処」<sup>「……山処のへ夜麻登能」一本薄項傾し汝が泣かま</sup> さく……<sup>(記神代・四)</sup> の構成などのように、別に考えるのがよいであろう。

## 五、ツ「津」

ツ「津」 津 四聲字苑云——<sup>(津)</sup> 和名豆 渡<sup>シ</sup> 水處 (和名抄・甘巻本十)

ツ「津」は、「船の泊る所。船着き場。」(『上代編』)の意に用いられる。

ところで、このツ「津」を、「ト(戸)の母音交替形」(『岩波古語辞典』)と見る説がある。ここに、ツ「津」とト「門・戸」とが母音交替ととらえられるかどうか、検討する必要がある。

ト「門・戸」は、上代特殊仮名遣のト甲類であり、ウ列とオ列甲類とは交替することが多いので、その点からはツ「津」とト「門・戸」とを母音交替と見る可能性が高いかと思われる。ウ列とオ列甲類の母音交替の例をいくらか挙げてみると、次のようである。

マスミ「真澄」……わが目らはますみの鏡へ真墨乃

鏡」……(萬三八八五) —マツミ……我が持てる

まそみ鏡にへ真十見鏡尔」……(萬三三三四)

ツガ「穆」……つがの木のへ都賀乃樹乃」いや継ぎ

継ぎに……(萬三二四) —トガ……とがの木の

へ刀我乃樹能」いや継ぎ継ぎに……(萬九〇七)

タヌシ「業」……この御酒のあやに甚業しへ阿椰珥

于多娜濃芝」……(神功紀・三三) —タノシ……

この御酒の御酒のあやに甚業しへ阿夜迹宇多陀怒

斯」……(記仲哀・四〇)

シヌフ「偲」……栗食めばまして偲はゆへ麻斯提斯

農波由」……(萬八〇二) —シノフ……家にも行

かめ国をも偲はめへ久尔袁母斯怒波米」(記允恭・

九〇)

アユヒ「足結」宮人の足結の小鈴へ阿由比能古須受

……(記允恭・八二) —アヨヒ……足結手作り

へ阿庸比陀豆矩梨」腰作らふも(皇極紀・一〇六)

ナユタケノ「枕詞」なゆ竹のへ名湯竹乃」とをよる

御子……(萬四二〇) —ナヨタケノ……なよ竹の

へ奈用竹乃」とをよる児らは……(萬二一七)

この他に、ノ「野」「……さ野つ鳥へ佐怒都登理」雉は響

ウ列とオ列甲類の母音交替の上にとらえられる。

このように見ると、ツ「津」とト「門・戸」とを母音交替としてとらえる可能性は高いと思われる。

ところが、以下のようなことを見ると、必ずしもそのようには言えないと考えられる。

和名類聚抄・元和古活字本に見える地名「津」「門」の例に次のようなものがある。

津・朝津阿佐布豆（越前国丹生郡）、會津阿比豆（陸奥国郡名）、石津伊之津（美濃国郡名）、榎津衣奈都（武蔵国男衾郡）、濕津字留比豆（上総国市原郡）、大津於保都（長門国郡名）、鹿津加津（上総国望陀郡）、川津加波都（駿河国安倍郡）、桑津久波都（攝津国豊島郡）、木津古都（近江国高島郡）、高津多加都（越後国頸城郡）、深津布加津（備後国郡名）、藤津布知豆（肥前国郡名）、船津布奈都（越前国今立郡）、御津美都（参河国寶飯郡）、室津無呂都（長門国豊浦郡）、楊津也奈以豆（攝津国河邊郡）、度津和多無都（参河国寶飯郡）、置津平木津（安房国長狹郡）、尾津平都（伊勢国桑名郡）  
ト門・表門宇波止（甲斐国山梨郡）、神門加無止（出雲国郡名）、再掲、勢門世止（筑前国糟屋郡、再掲）、田門多土（安藝国安藝郡）、津門都止（攝津国武庫郡）、長門奈加度（国名）、長門奈加止（安房国平群郡）

なお、トと訓のある「戸」の地名は、和名類聚抄・廿卷本には見えない。

これらの例を見ると、和名類聚抄の地名「津」の前項「」と地名「門」の前項「」とは共通していないことが知られる。このことからすると、ツ「津」とト「門」を母音交替として見るのはやや難しいと見られる。

右に地名「津門都止」があるが、これは、「船着き場」を表すツ「津」であるところの、狭くて出入口となる所を表すト「門」である土地を意味するかと見られて、どちらかと言えば、ツ「津」とト「門」とをそれぞれ個別的にとらえる地名にとらえられそうである。ツ「津」とト「門」を母音交替と見ることとは、やや離れた例と見てよいと考えられよう。

また、次のような例がある。

ヒロキツ「広津」 遂即安置於倭國吾礪廣津廣津此云比慮岐頭

第一・二節で見てきたように、ト「門・戸」は、狭くて出入口となる所、ないし、それを閉じるものを表すととらえられた。それに対して、ツ「津」は、形容詞ヒロシ「広」の連体形を上接することがあり広いこともある所であって、ツ「津」とト「門・戸」とが同様の意を表すとすれば、これは矛盾した例と言うことにならざるを得ない。

この例を見ると、ツ「津」とト「門」とを母音交替と見るのは難しくなってくる。

さらに、類聚名義抄に見えるアクセントを見ると、次のようである。

戸ト<sup>上</sup>（観法下九二「47ウ」、再掲）

肩トサシ<sup>上上平</sup>（観法下九二「47ウ」、再掲）

闔トビラ<sup>上上〇</sup>（観法下七五「39オ」）

外ト<sup>上</sup>（観法下一三四「68ウ」）

隣トナリ<sup>上上上</sup>（図二〇四）

嫁トツグ<sup>上上上</sup>（高59ウ）

これらのトは、上声（高いアクセント）・高起式である。それに対して、ツ「津」は、

津豆平（図三八）

のように、平声（低いアクセント）・低起式であつて、アクセントが異なっている。金田一法則によつて、高起式のト「門」・ト「戸」・ト「外」と、低起式のツ「津」とを、母音交替ととらえるのは困難であると考えられる。

以上、本稿は、上代特殊仮名遣のト甲類であるところのト「門」とト「戸」とト「外」について、狭くて出入口となる所を表すト「門」と、狭い出入口を閉じるものを表すト「戸」と、狭い出入口を出た所を表すト「外」として、

ともにとらえられることを述べ、また、ト甲類とト乙類のものがあつて些かわかりにくいト「処」について、ト甲類であるものの中にト「門」ととらえられるものがあることを述べ、さらに、ト「門」・ト「戸」と母音交替ととらえる説のあるツ「津」について、母音交替ととらえるのが困難であると考えられることを述べてきた。

なお、前稿「ト「利」をめぐる語群<sup>18</sup>」にとり挙げたトシ「利・鋭・聡」・トグ「磨」のトは、同じくト甲類であるが、平声であり、本稿にとり挙げたト「門」・ト「戸」・ト「外」が上声であるのとはアクセントが異なっているのので、別にとらえるのがよいと考えられる。

（二〇〇七・八・二六）

#### 注

- (1) 因みに、動詞終止形十名詞の構成の地名の例として、和名類聚抄・元和古活字本に（高山寺本に見えるものもあるが省略する）、四段動詞のものに、「飽波<sup>安久奈美</sup>」（大和国平群郡）、「會星<sup>安布保之</sup>」（駿河国有度郡）、「生葉<sup>以久波</sup>」（筑後国郡名）、「勝田<sup>加都多</sup>」（美作国勝田郡）、「住道<sup>須無知</sup>」（攝津国住吉郡）、「垂水<sup>多留美</sup>」（讃岐国那珂郡）、「益田<sup>末須太</sup>」（近江国浅井郡）、「結城<sup>申不岐</sup>」（下総国郡名）、下二段動詞のものに、「出石<sup>伊豆志</sup>」（但馬国郡名）、「得橋<sup>宇美志</sup>」（加賀国能美郡）、「撫河<sup>奈都加波</sup>」（備中国都宇郡）が見える（上二段動詞のものは見えない）。

- (2) 『萬葉』 178 [2001・9]
- (3) 『日本語史の諸相 工藤力男論考選』 [1999・8 汲古書院]、もと『国語国文』 42—7 [1973・7]
- (4) 『国語語彙史の研究』 21 [2003・3 和泉書院]
- (5) 『同』 22 [2004・3 同]
- (6) ユルニについては、別稿(三)にふれた。
- (7) 『萬葉』 104 [1980・7]
- (8) [1972・1 角川書店]
- (9) 金田一春彦氏(一)「現代語方言の比較から観た平安朝アクセント——特に二音節名詞に就て——」(『方言』 7—6 [1937・7])・(二)「類聚名義抄和訓に施されたる声符に就て」(『日本語音韻音調史の研究』 [2001・1 吉川弘文館] 第二編二、もと橋本博士還暦記念会『国語学論集』 [1974・10 岩波書店])・(三)「国語アクセント史の研究が何に役立つか」(『日本語音韻音調史の研究』 [前掲] 第三編一、もと『金田一博士言語民俗論叢』 [1953・5 三省堂]) 参照。引用は、金田一氏(三)による。
- (10) 「うとば」とのは」 7 [1990・11]
- (11) 国宝「仏足石」に対して、国宝「仏足跡歌碑」であるので、「仏足石歌」とせず「仏足跡歌」とした。
- (12) ヒツ・モミツは、本来、ヒツ「漬」・モミツ「黄葉」のように清音ツであり、ヒツ・モミツは上二段動詞ではなく四段動詞であるので、ここに挙げない。別稿(四)参照。
- (13) この歌謡は仏足跡歌体である。なお、注(11)参照。
- (14) ソトモ「背面」との関係については、宮地敦子氏『身心語彙の史的研究』 [1979・11 明治書院] 第一部第五章、もと「対義語の消長」(『国語国文』 37—7 [1968・7]) をも参照。

- (15) 「語文」(大阪大学) 86 [2006・6]
- (16) 余談であるが、白土三平の劇画『カムイ伝』の登場人物に、「風のトエラ」という名の抜忍がいる。白土の描く忍者の名には、『ワタリ』に登場するセセナギ(類聚名義抄「瀬」字の訓に「セ、ナキ」とある)のように、他にも古語が見える。
- (17) それぞれ、高山寺本に見えるものもあるが、省略する。
- (18) 「親和国文」 41 [2007・3]

キーワード…ト[門] ト[戸] ト[外] ト[処] ツ[津]

付記 本稿は、二〇〇六年十一月二五日(土)、第十一回佛教大  
学国語国文学会大会において、講演したものに基づくもので  
ある。ただ、一部、時間の関係などから講演において述べな  
かったところもある。

(大阪大学大学院教授)